瓔（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 12
瑪瑙集 …… 25
紅玉集 …… 27
５月号月評 …… 28
恵贈俳誌拝見 …… 30
特別作品「イタリア讃歌」 …… 32
琥珀集作品鑑賞 …… 34
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 35
Ⅱ …… 36
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 37
句集山ざくらに寄せて …… 39
山ざくら共鳴句 …… 40
俳誌交歓 …… 42
他誌転載 …… 43
姥の国父の蒼天（13） …… 44
北野天神吟行記 …… 46
ひこばえ通信 …… 48

2010/5　第50号

今月の一句

時計塔青嵐湧きつ吹きわかる　桂樟蹊子

（昭和十一年）

「京都大学の時計塔は、学園の象徴。学内に茂る樹々の葉が湧き立ち、その風が塔へ馳せ昇る。青嵐をせいらんと読むのは言葉の調和のため」との作者の註がある。一言一句を大切にされた師を懐かしく、慕わしく思い出させる言葉である。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

花粉症

塩路隆子

欲得を抛り出したる朝寝かな

吾もまた街道行かむ花の頃

福耳を褒められてをり亀の鳴く

初蝶の歓喜いささか狂ほしく

野佛の笑み豊かなり揚雲雀

煤けたるランプ朧に港町

春泥を来しとも見えず尼の品

いい女とは滅相な花粉症

PDF= 俳誌の salon

五月号光耀抄

塩路　隆子選

ひとり居のレトルト粥や春の風邪　杉本　綾
シクラメン恋のなりゆき見ないふり　宮崎左智子
気に入りの喫茶レトロな春煖爐　和田森早苗
文明の加速の都心春愁ふ　和田　郁子
どの舟も辿り着くまじ雛の国　阪本　哲弘
長老の和み薬膳蕗の薹　中川すみ子
岬端へ続く砂山風光る　坂根　宏子
草食系男子も交へ雛の宴　藤見佳楠子
啓蟄やゆっくり午後の自鳴琴　田中　芳夫
故郷へ戻り就職葱坊主　川崎　利子
立春や長編一気読み終へる　桂　敦子
認知症テスト難解山笑ふ　塩路　五郎
春炬燵声のみ張りを失はず　中本　吉信
独り身の仲間集ひて牡蠣料理　難波　篤直
駅うららラストラン撮るカメラ位置　竹内　悦子
練行衆の破れ紙衣や春寒き　笠井　清佑
母在さば草餅届く頃なりし　北尾　章郎

PDF= 俳誌の salon

ひとり寝を春満月に覗かるる　駒井　のぶ
一椀の白魚儚き生命かな　五十嵐　勉
陽炎や雲平筆の朱色恋ひ　小澤　菜美
城を背に梅各々の矜恃かな　山口キミコ
冠木門より直球の雪礫　松岡　和子
山水の静寂揺るがす初音かな　田中　浅子
「ふ」と上手く書けぬ手習ひ春愁　常田　創
寒月は夜行フェリーのナビゲーター　宮田　香
本広げにはか書斎の春炬燵　石川かおり
白狗を連れし官女や雛祭　安本　恵子
春寒の街騒更に救急車　大島みよし
吾死さば直系子なし春の月　西田　史郎
余生てふ終楽章や春の雪　新実　貞子
みどり濃き非常口灯春の闇　森下　康子
春一番気高き紫衣の尼の声　小林　成子
風光る花嫁教室のこる街　坂上　香菜
小男鹿の母呼ぶ声や梅の苑　鈴木　照子
花柄のシフォンのドレス風光り　田下　宮子
海女火場に漁を聞きつつ焼栄螺　井口　淳子
冴返る猿出没の回覧板　三川美代子

PDF= 俳誌の salon

春炬燵母離れせし虚脱感　前川ユキ子
伊吹への街道春の雪景色　増田　一代
探梅の句帳真白きままにかな　松田とよ子
亀鳴くや虫歯の痛み治まらず　松田　洋子
歳月を重ねし気品古典雛　美濃部くみ子
圧巻の千本桜山を染め　秦　和子
頬なでる春風いつかわらべ唄　日山　輝喜
春寒し心きりりと堂巡り　福本スミ子
同居せし自由不自由春寒き　北條　清子
緩やかな富士の裾野を雪解水　長濱　順子
岩礁の凪ぎたる礼文海胆の飯　高谷　栄一
浮寝鳥見る楽しみや湖岸線　竹内喜代子
春疾風洗濯物がタンゴ舞ふ　土井くみ子
天鵞絨の法衣を纏ひ座禅草　冨田ヒナ江
文明の芥目立てり春の川　笹井　康夫
湯かげんの良くて長風呂春しぐれ　清水侑久子
チューリップのよもやま話深夜便　鷲見多依子
春愁や九官鳥の媚びる癖　片岡久美子
季を告げる道の辺の梅咲き初める　吉良　敏子
帽子買ふ春いっぱいのおしゃれ店　小林　久子

PDF= 俳誌の salon

残雪の山並み遥か鳶の群　青山　正英
連獅子にとよもす拍手春歌舞伎　飯田美千子
客もなく折り返すバス猫柳　池田加寿子
天女説のこる余呉より梅だより　伊東　和子
雛飾り美と健康をありがたう　伊藤　憲子
春めくや皆満足のBグルメ　伊庭　玲子
照り翳り浮雲遊ぶ春ひと日　大松　一枝
ゆるやかな風の吐息や飛花落花　岡　佳代子
風に舞ふ片栗の花鳥となり　山本　節子
うららかやガラスに残る嬰の手形　山本　孝夫
恰好の切株木椅子蘖ゆる　吉田　晴子
鶏小屋の屋根が遊び場雀の子　辻　知代子
軒先に縄の帯しめ赤かぶら　辻　香秀
さむ空にぱっとあかるくうめのはな　森下ちさと
めをだしたどてのくさむらふきのとう　廣瀬まさや
ちゅうごくのおりょうりつくったはるの日に　土井ほのか
あたたかいコロッケいっぱい作ったよ　塩路　彩奈
十の春乳歯なくなり大人顔　高野　綸
おひなさん写真で場所をかくにんだ　廣瀬　結麻

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

金縷梅

杉本　綾

金縷梅や子は若き日の亡夫に似て
オリンピック選手の妙技桜咲く
ひとり居のレトルト粥や春の風邪
蔵出しの徳利に活ける花菜かな
草餅や夫のゐぬ世にもう慣れて
梅花祭すれちがふ人よき薫り
時折は山見て畑を耕せる

春の紅

宮崎左智子

四万十川の風を孕みて鯉渡り
啓蟄やうごめく蚯蚓五寸五分
シクラメン恋のなりゆき見ないふり
こころの戸少し開きて春の紅
花待たず八丁堀の主水逝く（藤田まこと）
交叉点輪ゴムを拾ふ雀の子
ひと処夕日に染みし花辛夷

白鳥帰る

坂根　宏子

大佐渡も小佐渡も霞む荒海に
白鳥の帰る日近し越の潟
梅ふふむ八一館への石畳
岬端へ続く砂山風光る
列車行く田畑はいつか春の色
長き留守にヒヤシンスの香部屋に満つ
草青みウォークの足の軽やかに

PDF= 俳誌の salon

山笑ふ

和田森早苗

幾重にもぶらさがる絵馬大試験
翻る軍手や涅槃西風強き
風荒き空を一周雁帰る
コンビニの外で紫煙の春帽子
逆上りまあるく出来て山笑ふ
繰り返し聞く留守番電話や春の雷
気に入りの喫茶レトロな春煖爐

蓬餅

和田　郁子

文明の加速の都心春愁ふ
春山のパステルカラー刻忘じ
柔らかき雲の流れや春の月
仰ぎつつ正す姿勢や竹の秋
出来立てや店主自慢の蓬餅
それぞれの五輪にドラマ二月尽
香席の雅びここちや花の昼

雛の國

阪本　哲弘

源流の飛沫浴びけり岩燕
鬼打の豆零れをり神学部
春雨や眼下の傘のくらげめき
マニフェストなどは存ぜず地虫出づ
木簡に宿酔とあり亀鳴ける
マラソンの迫る足音春の雨
どの舟も辿り着くまじ雛の國

山笑ふ

中川すみ子

折紙の雛贈られて退院す
白光の真珠育くみ烏貝
盆梅の百年の香や緋毛氈
三井寺を中腹にして山笑ふ
長老の和み薬膳蕗の薹
はこべらの柔らかきかな鶏が鳴き
摘み切れぬほどの土筆に至福感

PDF= 俳誌の salon

湖北の鼓動

藤見佳楠子

銀メダル真央麗しく桃の頃
窓開けて招き入れたる芽吹風
白梅や城を遠見の野点傘
息かけて拭ふ手鏡春愁
草食系男子も交へ雛の宴
朝釣りの諸子が馳走浦住ひ
鮎挿して湖北の鼓動始まりぬ

啓蟄

田中　芳夫

春泥に残る生活の轍跡
雛の夜遅く戻りて独り飯
燈台の明るき丘へ地虫出づ
啓蟄やゆっくり午後の自鳴琴（オルゴール）
大阪空襲その夜鶏鳴春寒き
モンゴルの横綱ひとり霾れる
春闘のシュプレヒコール浪速弁

葱坊主

川崎　利子

宇治橋の桧の白木二月尽（伊勢神宮）
不器用に鮴（ほつけ）へとびて胡獏（とど）のショー
残雪の三角点へリフトゆく（御在所岳）
電飾のオーロラに酔ひ春の宵
故郷に戻り就職葱坊主
茎立ちや公民館の申し込み
吾が余生労ひうらら誕生日

水仙花

桂　敦子

バス待ちに梅見の話まとまりぬ
一束の水仙の香を抱き見舞ふ
凍つる滝岩に貼りつき造形花
立春や長篇一気読み終へる
路地奥の地蔵に楚々と水仙花
山茶花に少し厚めの雪帽子
精米所に鳩も顧客や冬日差

PDF= 俳誌の salon

認知症

塩路　五郎

春泥の靴跡あまた隣保館
小児科に植物図鑑春の風
久々にメール着信合格子
認知症テスト難解山笑ふ
シュトラウス聞きてドライブ木の芽晴
現世に思案顔なる古雛
雛の客ひとりは河内言葉かな

草木の芽

中本　吉信

木々の芽の先鋒風にたぢろがず
目標は日に七千歩青き踏む
鶯の片鱗示すをさな声
飛火野や草芽貧る鹿ばかり
春炬燵声のみ張りを失はず
春陰や老いて幼に帰す五体
辞世てふ後世（ごせ）への門出春の虹

三　椏

難波　篤直

三椏の花芽ふくらむ山路かな
納税の申告会場笑ひなし
起きぬけのドカ雪に目を瞠りたる
独り身の仲間集ひて牡蠣料理
バレンタイン今やその日と無縁なり
人気なき古寺の白梅慎ましき
献立は何処も巻寿司節分会

草食系

竹内　悦子

駅うららラストラン撮るカメラ位置
春塵や孔雀の羽は閉じしまま
黄沙降り三井寺の甍を覆ひけり
涅槃西風困りし時はいまも妣
鴨引くや転勤なしの子の家族
たんぽぽや草食系に子は育ち
褒められてますます五色椿かな

PDF= 俳誌の salon

チューニング

笠井　清佑

おぼろなり夜気淡あはと沈みける
月ヶ瀬の梅を俯瞰の鳶舞へる
車椅子並べ語らふ梅見かな
税務署へ足早の人山笑ふ
練行衆の破れ紙衣や春寒き
料峭や人けはひなき籠り堂
チューニングの響き弾めり春兆し

行火抱く

北尾　章郎

冬の星切磋琢磨を教へけり
合格子ひと日ピアノの弾みけり
母在さば草餅届く頃なりし
風突ける飛騨の出格子囲炉裏端
朝市の客呼ぶ媼行火抱き
出格子の家並やほのと雪明り
朝市に飛び交ふ訛冬ぬくし

ひな祭

駒井　のぶ

冬の夜時々亡夫（つま）の声に覚む
紀元節と呼びし旗日のなつかしき
摘み時の頭揃えて蕗の薹
紅梅や浦畑に季を主張せる
ひとり寝を春満月に覗かるる
自作雛並べてけふのひな祭
春播きの種子配られて畑に出る

白魚（しらお）

五十嵐　勉

ほつほつと風に媚びつつ雪柳
椿落つうち重なりて白椿
忙しく椿啄む小鳥たち
一椀の白魚儚き生命かな
春日や細目かがやく地蔵尊
剥落の金の宝珠や春うらら
桶の水浴びゐる行者春寒き

PDF= 俳誌の salon

藍育つ

小澤　菜美

陽炎や雲平筆の朱色恋ひ（滋賀県無形文化財）
石棺の目覚め促がす芽吹風
春を待つ藍匠藍を育てつつ
雛の燭揺るるともなき風の日々
子の家にしばし馴れ住む目惜時
通販のブルーデージー発注し
雪解田の光へ消ゆる郵便夫

梅行脚

山口キミコ

大阪に団体あまた梅日和
大阪城ぬけて天満橋（てんま）へ梅行脚
城を背に梅各々の矜恃かな
中の島をつなぐ橋脚水温む
料峭や墨痕しるき書道展
盆梅の案内待つ日々落着かず
彦根城見据えて春の伊吹山

雪椿

松岡　和子

春めきて新婚の旅なぞりゆく
春の雪よりも冷たき雨に逢ひ
子を抱く縄文土偶冬うらら
峡住みに長居好きなる風邪の神
冠木門よりの直球雪礫
雪しまく昼を灯して峡の邑
本日の一のもてなし雪椿

初音

田中　浅子

春めきて障子の日差し膨らみぬ
電話からソプラノの声合格子
地に触れむばかり老梅しだれけり
山水の静寂揺るがす初音かな
故郷の説抜けぬよ山笑ふ
絵手紙にときめく心梅盛り
梅東風や願ふあまたの絵馬重き

PDF= 俳誌の salon

五月号月評

塩路　隆子

結社によっては片仮名文字はご法度のところもある。嘗て樟蹊子には外来語のみを仮名でと指導されたものである。今月号の巻頭句を始めとして、たまたま片仮名入りの俳句が多い月である。日本語も仮名ナイズ化され大方の人が日常使っている語であれば、わが結社では俳句に仮名を使うことを容認している。

また季語「花粉症」も春の季語とすることにしたい。「遍路」「彼岸」が春の季語で、秋なれば「秋遍路」「秋彼岸」とする。であれば当然同じ考えで「秋の花粉症」とすればいいのではなかろうかと考えた末である。お使いいただいて結構とこの場を借りて申し上げたい。

ひとり居のレトルト粥や春の風邪　　杉本　綾

作者は二年前に共に俳句に勤しんでおられたご主人を亡くされお独り住まいである。「亡夫の靴朧へむけて揃へけり」の句で本部句会の第一席を獲得されたのは記憶に新しい。病の軽重を問わず独り居は大事がなにより。病気の体力維持にすぐに役立つレトルト粥など用意のいい作者は常備されているのであろう。現代人の知恵とも言える生き方を作者は習得され、上手く現代を取り入れた生活を、句に詠み上げている。ご主人を亡くされた当時にくらべると精神的にも身体的にも目に見えて強くなられた作者の片鱗が見える句である。もう安心。頑張っていただきたい。惹かれた作品である。

こころの戸少し開きて春の紅　　宮崎左智子

老々介護を続けておられる作者の話を聞くと他人事とは思えない面が多々ある。ごく最近、明るい声の「随分心が軽くなりました」と言うお電話を頂いたあとの句会に出句された一句に作者の拭ききれた思いが伝わる。「こころの戸少し開きて」の措辞に幾万の思いが含まれていることに注目したい。季語「春の紅」の措辞が天元の一石の役目を充分に果たしている。本来明るい性格の作者であるが、今後も果てしない介護に向かい強い心でもって、打ち開いていただくよう祈るばかりである。

PDF= 俳誌の salon